東方 紅魔館物語

SESERAGI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方　紅魔館物語

【Ｎコード】
Ｎ６２３９Ｙ

【作者名】
ＳＥＳＥＲＡＧＩ

【あらすじ】
瀬世羅木　努青年が幻想郷の紅魔館に来る物語。物語を考えてた瀬世羅木は物語が思い浮かぶ困ってしまう。目を瞑り気が付くとそこは見た事の無い森だった。瀬世羅木は森を出て大きな建物がある。それが幻想郷に出る紅魔館だと知る。紅魔館の人物達に会う瀬世羅木。彼の運命は、そして彼は現実世界に戻れるのか。

登場人物（前書き）

初めまして。作者のＳＥＳＥＲＡＧＩです。長文で失礼します。前作を見て頂いた方はありがとうございます。今回は連載と言う形で物語を書かせて戴きます。なので連載される迄の間が空きすぎと思われる方も出てくると思います。今回から小説の書き方を替えて行きます。小説を読まれる際の注意事項。原作のキャラクターを使用させて戴いております。この物語でキャラクターの言動、行動、性格、その他が原作と違うと思われるかたがいると思います。ご了承下さい。

登場人物

瀬世羅木　努
物語の主人公です。２０代の青年で趣味で自作の物語を考えてる。

レミリア・スカーレット
物語の副主人公です。紅魔館の主で吸血鬼。少女の姿をしているが何百年と生きている。

フランドール・スカーレット
紅魔館の主のレミリア・スカーレットの妹。何を考えてるか分からない破壊的行動を取る事からレミリアに地下牢に入れられてる。少女の姿をしているが何百年と生きている。

十六夜　咲夜
紅魔館の主のレミリア・スカーレットに尽くすメイド長。２０代位の女性。

パチュリー・ノーレッジ
紅魔館のレミリア・スカーレットの友人で図書館長。魔法使い。少女の姿をしているが何百年と生きている。

紅美鈴
紅魔館の門番を担当する中国人。２０代位の女性に見えるが何百年と生きている。門番をサボり咲夜にお仕置きを受ける時がある。

小悪魔
紅魔館の図書館長のパチュリー・ノーレッジの司書。２０代位の女性に見える。

初めての体験

空は星が出る冬の空、満月も出てる。

少し新しいアパートが見える。

その一室で一人の青年がパソコンをじっと見てる。

青年「・・・。」

パソコンを見て悩んでる。

青年「趣味で物語を書こうとしてるけど題名だけでちっとも物語が思い浮かばないよ。」

パソコンには「東方紅魔館物語」と書かれてる。

青年「少し休憩しよう。」

青年は台所に行って冷蔵庫を開け紅茶を出しコップに淹れた。

青年は紅茶を飲む。

青年「・・・紅茶と言えば、やっぱりレミリアだな。」

青年は物語を考えながら紅茶を飲んでる。

「ピンポーン」

チャイムの音だ。青年が返事をする。

青年「はーい！。」

「瀬世羅木さんのお宅ですか？」

声がする。青年が玄関を開けた。

「はい、瀬世羅木です。」

青年、瀬世羅木が玄関の外に立つ人物を見る。

瀬世羅木「宅配便の方ですか。」

宅配便の男性は頷く。

宅配便「お待たせした品をお持ちしました。」

瀬世羅木は品を受け取る。

瀬世羅木は宅配便の方にサインを書いて玄関を閉めた。

瀬世羅木が品物の入ってる袋を見る。

瀬世羅木「待っていたんだよな♪」

瀬世羅木は袋を開ける。中にレミリアスカーレットのライターが入ってる。

瀬世羅木は中の物を取り出す。

瀬世羅木「さすがネットオークション探せば何でも在るもんだな。」

瀬世羅木はライターをポケットに閉まった。

瀬世羅木「よし、休憩はもう良いから。続き、続き。」

瀬世羅木はパソコンの在る所に戻る。

瀬世羅木「よし、書くぞ！。」

瀬世羅木はパソコンを打つ。

１時間後。

瀬世羅木「ぬわぁぁぁ！駄目だ全然思い浮かばない！。」

瀬世羅木はキーボードをどかして顔を置いた。

瀬世羅木「もう、夜中の１０時か。少し目を瞑って頭の整頓でもしよう。」

瀬世羅木は目を瞑った。

瀬世羅木「！！！。」

突然、肌に寒さを感じ目を開けた。

瀬世羅木「どう・・・なっているんだ??」

瀬世羅木は驚いた、そこは見た事の無い森の中だ。

瀬世羅木「何て事だ。・・・取りあえず適当に歩くぞ。」

瀬世羅木は森の中を歩く。出口が見えて来た。

瀬世羅木「よし！。出口だ。」

瀬世羅木は走る。

瀬世羅木は森を出た。

瀬世羅木「何だ？。この大きな建物は・・・。」

瀬世羅木は目を疑う、目線の先に大きなレンガで造られた建物がある。

「ガーン！！ガーン！！」

建物の鐘が鳴る。

瀬世羅木はこの建物に見覚えのある表情を浮かべる。

瀬世羅木「・・・まさか、これは、紅魔館？」

瀬世羅木は右手で頬っぺたを引っ張った。

瀬世羅木「イッテーテッ！」

痛みを感じる。

瀬世羅木「夢では無い・・・。」

瀬世羅木はいつも肌にはなさず持っている携帯を出した。

携帯で紅魔館と検索して画像を見る。画像と建物が一致する。

瀬世羅木「・・・こんな、こんな事は初めてだ。俺はどうやらゲームの・・幻想郷の世界に来てしまった・・。」

瀬世羅木はただ呆然と立っている。

瀬世羅木「これも何かの巡り合わせだ、せっかく今、こうして紅魔館の前にいるんだ。俺が願っても会えなかった人物に会える絶好のチャンスだ!!」

瀬世羅木は門の方に走って行った。これから彼の運命が変わるとも知らずに。

初めての体験（後書き）

第1章は、主人公だけの登場になってしまいました。次回からはいよいよ、門番やらメイドやら主やら続々登場します。瀬世羅木は果たしてどうなるのか。次回にご期待あれ。

侵入者扱い

瀬世羅木は門の前に着いた。

緑色の服を着た中国人風な女性が立っている。

女性は立ったままの状態で眠っている。

瀬世羅木「俺の記憶が合ってればこの女性は紅美鈴・・。」

瀬世羅木はまじまじと見る。

瀬世羅木「随分、器用な人だな。立ったまま寝るなんて…。」

瀬世羅木は女性の前に立つ。

瀬世羅木「美鈴さんが起きてくれないと入るにも入れないな。」

瀬世羅木は美鈴の肩に手を置いて揺らした。

瀬世羅木「すいません！起きて貰えますか。」

瀬世羅木は彼女を強く揺らす。

「バキッ！！」

美鈴の右パンチが瀬世羅木の顔に直撃した。

瀬世羅木「いってぇーー！！」

骨にヒビが入る程の力で殴られた。

瀬世羅木は自分の顔をなぜる。

瀬世羅木「・・・恐ろしいパワーだ…。下手に起こさない方が良いな。」

美鈴はまだ眠っている。

瀬世羅木は門を開けて中に入った。

瀬世羅木「これじゃ、不法侵入だな…。」

瀬世羅木は歩く。大きな扉が在る。

瀬世羅木「さすがにここからは無断に入れないな。」

瀬世羅木は門を叩こうとした。

その瞬間。

瀬世羅木の背後から首もとにナイフを当てられた。

瀬世羅木「！！！。」

瀬世羅木はその場で固まった。

？「この館を知っての不法侵入？」

女性の声だ。

瀬世羅木「・・・その声は十六夜咲夜…さんですね…。」

あくまで記憶上の事で言ってる。女性が返事を返す。

女性「なんで私の名前を知ってるかは知らないけど、貴方には来て貰うわよ。」

瀬世羅木「分かった…。」

瀬世羅木は咲夜に連れられ館の中に入る。

階段を上がり長い廊下を渡る、そして扉の前で止まる。

咲夜「お嬢様、侵入者をお連れしました。」

扉を開けて部屋に入る。

瀬世羅木は部屋に座っている女性を見て驚いた。それは、自分が一番に会いたい人レミリアスカーレットその本人が座っているからだ。

だがこの状況下でそれを喜べなかった。一つ間違えたら自分は殺されるかも知れない。そう思ったからだ。

レミリア「貴方に聞くわ。不法侵入した訳を話してくれないかしら？」

少女見たいな声で聞こえる。だがその言葉には強い威圧感を感じる。

瀬世羅木「レミリアスカーレット殿、不法侵入をしたことは謝ります。」

レミリアが首を傾げる。

レミリア「何で私の名前を知ってるかは分からないけど、答えが間違ってるわね。私は訳を聞いてるのよ…。」

ごく一般の少女の声だが恐ろしく聞こえる。

咲夜「お嬢様、先程この侵入者、私の名前も当てたんですよ。もしかして私達が忘れてるだけで実は会った事がある人かと？」

レミリアは首を横に振る。

レミリア「いいえ、咲夜、私は一度も会った事は無いわ。・・・名前を知ってるのは、どうせ誰かから聞いたんじゃないの？」

咲夜は頷く。

瀬世羅木「話しても信じて貰えるか分かりませんが、自分はこの世界から違う世界から来ました。どうやって来たと言われても自分でも分からないんです。」

瀬世羅木は懸命に話す。

咲夜が瀬世羅木の首もとにナイフをまた当てた。

咲夜「そんないい加減な話をよくもお嬢様に！死になさい！！。」

咲夜が瀬世羅木の首を切ろうとした。

その前に。

レミリア「咲夜…。まだ、殺すのは止めなさい。」

咲夜は動きを止めた。

瀬世羅木の心臓の鼓動が速くなる。

瀬世羅木「いっいっ今、ほっ本当に殺されるところだった。」

顔から冷や汗をだし心の中で言う。

瀬世羅木「恐ろし過ぎる。自分の世界では尊敬するキャラクターだが、いざ自分がターゲットにされていると思うとこれ程までに恐ろしいとは思わなかった。」

瀬世羅木は動揺を隠しきれて無い。

レミリアが見る。

レミリア「貴方が違う世界から来たのは信じるわ。幻想郷の皆は、まずそんなに怯えないからね。」

瀬世羅木「いや、まず、俺の立場に立たされたら幻想郷の者でも怯えると思うけど…。」

心の中で呟く。

レミリア「咲夜、この男をフランのいる地下牢に入れてあげなさい。」

その言葉に瀬世羅木は震えた。

瀬世羅木「・・・フランって、貴方様の妹に殺されろと言う事ですね…。」

レミリアは微笑む。

レミリア「フランの事も知っているのね。なら話しは早いわ。そう、貴方の運命はもう決まっているのよ……。」

咲夜が瀬世羅木を掴む。

瀬世羅木「何て事だ……俺は一番に尊敬している人物のレミリアに死の運命をかけられるなんて……。」

瀬世羅木はうつ向き、そのまま咲夜に連れられ部屋を出された。

レミリアが紅茶を飲む。

レミリア「フラン。たっぷり遊んであげるのよ…。」

レミリアが又も微笑んだ。

侵入者扱い（後書き）

いよいよ第2章も終了しました。瀬世羅木はフランのいる地下牢に連れて行かれる。彼は一体、どうなってしまうのか。

次回は「奇跡を呼ぶ宅配物」でお会いしましょう。

奇跡を呼ぶ宅配物

瀬世羅木は咲夜に地下牢に連れて行かれてる。

瀬世羅木「・・・・。」

瀬世羅木はうつ向いたままだ。

階段をおりる。

辺りは暗い闇の中だ。

瀬世羅木「地下なのに随分暑いな…。」

咲夜は瀬世羅木を奥の方まで連れて行く。

突き当たりに鉄の扉が在る。

鍵はかかっていない。

咲夜が扉を開ける。

咲夜「入りなさい。」

瀬世羅木は中に入った。

咲夜が外から扉を閉める。

瀬世羅木「・・・フランのいる地下牢…。」

瀬世羅木の体は震えてる。

？「・・ふふふ。」

女性の声だ。

瀬世羅木は声のする方を向く。

瀬世羅木は今度こそ完全に震えた。

瀬世羅木の目線の先にフランドール・スカーレットその本人が立っているからだ。目を輝かせて。

フラン「貴方はどんな風に壊されたい？…。」

恐ろしく聞こえる少女の声だ。

瀬世羅木の顔から大量の冷や汗が出る。

瀬世羅木「・・・フラン。壊すと言う事は俺を殺すんだな……。」

フランが微笑む。

フラン「こんな地下牢にいる私の名前を知ってるのね・・・。お姉様から聞いたんでしょ？…。」

瀬世羅木は首を横に振る。

瀬世羅木「いや、その前から知ってる。俺の尊敬する人物の一人だ

から…。」

フランが首を傾げる。

フラン「どこの誰か分からない人間に尊敬されても困るわ…。」

瀬世羅木「！！！。」

フランの体から赤いオーラが出る。

フラン「跡形も無く壊してあげるわ！！。」

フランの握る両手が輝く。

瀬世羅木「まっまずい・・本当に殺される……。」

瀬世羅木は下がる。

フランの両手は瀬世羅木に向けられた。

フラン「ふふ…。」

フランは恐怖におののく瀬世羅木の顔を見て喜んでる。

フランが両手を広げた。

フラン「スターボウブレイク！！。」

瀬世羅木は物凄い光に包まれ様とする。

瀬世羅木「・・・死んだ……。」

瀬世羅木は光に包まれた。

フラン「ふふふ…跡形も無くなったわね」

光が止む。フランが瀬世羅木の立っていた所を見る。

フラン「！！！。・・・なんで？！。」

フランが瀬世羅木の立っていた所を見て驚いた。

瀬世羅木はキズ一つ無かった。

瀬世羅木「・・・どうなっているんだ？…。」

瀬世羅木は体を触る。

瀬世羅木「キズ一つ無い……。」

瀬世羅木「！！！。」

瀬世羅木の右ポケットが光ってる。

瀬世羅木はポケットに手を入れて光ってる物を出した。

瀬世羅木「これは！！。」

それは瀬世羅木が宅配物で届いた品。レミリアスカーレットのライターだ。

瀬世羅木「ただのライターなのにどうしてだ?。」

だが今はそれを気にするのは止めた。ただ運が良かった、そう思うだけにした。

フラン「浴びせ攻撃が効かないなら、直接攻撃よ!!。」

フランは右手にレーヴァテインを出し瀬世羅木の頭上に振り上げる。

フラン「死になさい!!。」

瀬世羅木「くっ!。」

フランはレーヴァテインを降り下ろした。

「ガキーーン!!。」

レーヴァテインは瀬世羅木の頭に直撃した。だが・・・。

瀬世羅木「痛く無い…。」

瀬世羅木はレーヴァテインを退かし頭を触った。

フラン「どうして!、どうして!何も効かないの!。」

瀬世羅木はフランを見る。

瀬世羅木「どうやら俺は特別な力で守られてる様だ。・・・だけどおかしいな美鈴さんのパンチは効いたんだけどな?」

フランがうつ向いた。

フラン「・・・どうやら、貴方を殺すのはお姉様に任せるしかないわね……。」

フランはそう言うと目を閉じた。

扉が開いてレミリアスカーレットが入って来た。

レミリア「フラン。事情は貴方の心の声で聞いたわ。この男は貴方では無理の様ね。」

レミリアは瀬世羅木の前に立つ。

瀬世羅木「レミリア……。なんて事だ、主と闘うはめになるなんて……。」

レミリアは瀬世羅木を睨む。瀬世羅木はそれを見る。

奇跡を呼ぶ宅配物（後書き）

第3章も終了しました。瀬世羅木はレミリアと闘う事になる。はたして、彼の新たに持ったと言う力でレミリアの力を止める事が出来るのか。次回は「主の力と涙で」でお会いしましょう。

主の力と涙で

瀬世羅木はレミリアの前に立っている。

瀬世羅木「レミリア殿、俺が一番に尊敬する人物なのに、どうしてこんな事に・・・。」

瀬世羅木はうつ向いた。

レミリア「貴方には特別な力がかかっているのはフランから聞いたわ。・・・でも、その力が私に通用するかしら?」

レミリアの体からオーラが出る。

レミリア「 覚悟しなさい!!。」

レミリアは右手を広げた。

瀬世羅木「・・そっそれは……、グングニル…。」

瀬世羅木はレミリアの握るグングニルを見る。

そのグングニルは自分の知る限りのグングニルとは違い余りに大きすぎる。

レミリア「この事も知っているのね・・・。でもこれの痛みは分からないでしょ?」

レミリアの瞳が輝く。

瀬世羅木は大量の冷や汗が出る。

瀬世羅木「・・・グングニル…。まさかそれを俺が喰らう事になるとは…。」

瀬世羅木「！！！。」

ポケットに入っているライターが猛烈に輝く。

レミリア「貴方を守る力の源はそれね。」

レミリアが右腕を上げグングニルの先端を瀬世羅木に向けた。

レミリア「消滅しなさい……。」

レミリアはグングニルの握る右腕を最高に勢いをつける。

瀬世羅木「来る！！。」

レミリアはグングニルを投げた。

物凄い衝撃波を放つ。

瀬世羅木の所に一直線に飛ぶグングニル。

瀬世羅木は無駄だとは分かっているが両手を前に出した。

瀬世羅木「絶対に受け止める！。俺の尊敬する人物に消されるなんて…。そんな結果は酷すぎる！。」

「ドン！！！。」

グングニルが瀬世羅木の両手の前に止まる。

物凄い熱が伝わる。

瀬世羅木「やっぱり、駄目なのか！。」

瀬世羅木はグングニルの衝撃波で後ろに押される。

レミリア「そろそろ、爆発するころね…。」

レミリアの言葉通りグングニルは猛烈に輝く。

瀬世羅木「大丈夫だ！。このライターの力さえあれば…。」

瀬世羅木は必死にグングニルの先端を押さえてる。

「ぴしっ！！。」

瀬世羅木「えっ？！。」

ポケットのライターにヒビが入った音だ。

瀬世羅木「まずい！！。」

「ドッカーーン！！！。」

グングニルは大爆発した。

辺りは凄い煙が立つ。
フランの力でも動じない地下牢の壁にヒビが入った。
レミリア「・・・。」
レミリアが煙の立つ方、瀬世羅木の立っていた方を見る。
煙が止んで来た。
レミリア「フラン、貴方が破壊する筈の男を私が破壊してやったわ。」
レミリアはフランの方を向く。
フラン「・・・おっお姉様……。」
フランが瀬世羅木の立っていた方を指差す。
レミリアは振り向く。
レミリア「・・・なっ何で……？？。」
レミリアは驚いた。
本来なら消滅してる筈の人物が立っているからだ。
瀬世羅木「・・・くっ、今のは本当に死んだと思ったよ。」

瀬世羅木の両手から血がたっぷり出てる。

瀬世羅木はポケットに手を入れてライターを出した。

ライターにはヒビが入ってる。

瀬世羅木「このライターが完全に壊れてたら、俺は完全に消滅してた。」

レミリア「そう、ならもう一発投げたら完全に消滅するのね。」

瀬世羅木はレミリアを見る。

瀬世羅木「これまでか！。」

レミリアは又右手を広げた。

だが。

レミリア「やっぱり止めるわ。」

フランが驚く。

フラン「お姉様！何で、相手は弱ってるのよ！もう一発喰らわしたら確実に……。」

フランが言い終える前にレミリアが。

レミリア「いいえフラン、だから尚更によ。ただの人間で私のグングニルを喰らっても生きている。そんな事は初めてだわ。」

レミリアが瀬世羅木の方を向く。

レミリア「貴方にもう一度聞くわ、貴方は館に不法侵入したのでは無く此所に様が有って来たのでしょ？」

瀬世羅木「・・そうです。紅魔館の方々の物語を書こうと思ってこの紅魔館に来ました。」

レミリアは微笑む。

レミリア「そう…物語を書く為に。なら貴方は立派なお客様ね。」

レミリアはハンカチを瀬世羅木に渡した。

瀬世羅木「レミリア殿、これはハンカチ…。」

レミリア「両手の止血用よ。貴方にあげるわ。」

瀬世羅木は涙が出る。

瀬世羅木「ありがとうございます。」

瀬世羅木はハンカチで手を拭いた。

レミリア「まだ、貴方の名前を聞いて無かったわね。」

瀬世羅木「俺の名前は瀬世羅木努です。」

レミリア「私の名前は知っていると思うけど言うわ。私はレミリア

スカーレット。そして妹のフランドール。」

瀬世羅木は頷く。

レミリア「後、貴方が接しやすい喋り方で良いわ。貴方は私達の大切なお客様だから。」

瀬世羅木は血濡れのハンカチで涙を拭いた。

瀬世羅木「分かりました。」

レミリアは又、微笑む。

フランが瀬世羅木に近づく。

フラン「ふーん、何か男なのに弱そうに見える。」

フランは瀬世羅木の腰を叩いた。

瀬世羅木「あぁぁぁぁ！！。」

激痛が走る。先程のグングニルの影響だ。

レミリア「フラン、駄目よ！。」

フラン「ふふふ…。」

フランが微笑む。

瀬世羅木はレミリアとフランを見る。

瀬世羅木「一時はどうなるかと思ったけど何とか訳を分かってくれた。」

瀬世羅木はほっとした顔になる。

これからが彼の人生を大きく変える。

主の力と涙で（後書き）

第４章も終了しました。瀬世羅木は何とかレミリア達に理解して貰う事が出来ました。だけど彼はこれからが大変、物語を書いて行く彼に驚く事が。次回は図書館長と司書がいよいよ登場する。次回、「紅魔館の図書館」でお会いしましょう。

紅魔館の図書館

瀬世羅木はレミリアの部屋の椅子に座っている。

瀬世羅木「なんか、緊張しますね。」

レミリアが瀬世羅木を見る。

レミリア「緊張してる様ね、咲夜に紅茶でも淹れて貰う様に言うわ。」

レミリアは咲夜を呼んだ。

咲夜が来る。

レミリア「彼が貴方に頼みたい事があるみたいよ。」

咲夜が瀬世羅木の方に行く。

瀬世羅木「えっ？」

レミリアが微笑む。

レミリア「瀬世羅木、咲夜に紅茶をお願いするんじゃなかったのかしら？」

瀬世羅木「えっ。自分が頼むんですか？！。」

瀬世羅木の心臓の鼓動が早くなる。

瀬世羅木「余計に緊張させられるな。それにさっき怖い目にあったし。」

瀬世羅木は咲夜の方を向く。

咲夜は微笑んでる。

とてもさっき、自分が殺されそうにあった時の表情とは思えない表情だ。

咲夜「もしかして、私が恐ろしく見えるのですね。」

図星を突かれた。

瀬世羅木「そっそれは…。」

咲夜「どうやら当たっているみたいですね。心配要りません、あんな表情をするのは滅多に有りませんから。」

瀬世羅木は椅子に座ってちっこくなってる。

瀬世羅木「恥ずかしすぎる。これじゃ自分が子供じゃないか」

咲夜「紅茶で良いんですね？」

レミリア「咲夜、あの紅茶を淹れてあげなさい。」

咲夜は部屋を出た。

レミリア「瀬世羅木、体の痛みは取れた？」

さっきのグングニルの事を聞いてる。

瀬世羅木は体を動かす。

「ズキッズキッ。」

レミリア「ズキズキ聞こえるわね。ごめんなさいね、本気で投げてしまって。」

瀬世羅木「いや、こんなのは時間が経てば治ります。」

咲夜が部屋に入って来た。

咲夜はカップに紅茶を淹れてる。

紅茶を渡された。

レミリアも紅茶を持つ。

瀬世羅木「いただきます。」

瀬世羅木は紅茶を見る。

瀬世羅木「随分紅いな。」

瀬世羅木は紅茶を飲む。

レミリア「私の血のブレンドよ。」

！！！。

紅茶が喉につっかえた。

瀬世羅木「ごほっごほっ！！。」

レミリアが笑う。

レミリア「冗談よ。」

瀬世羅木「びっくりしましたよ。・・・でもレミリアの血を飲むと吸血鬼に成って永遠に生きれるって話は本当何ですか？。」

レミリアが頷く。

レミリア「貴方以外と物知りね。そうよ、私の血を飲めば吸血鬼になって永遠に生きれるのよ。」

瀬世羅木「よして下さいよ。それは永遠に生きれるって言うのは興味有るけど、吸血鬼になるのは……。」

瀬世羅木とレミリアは笑った。

紅茶を飲み終えレミリアが。

レミリア「物語を書く為に来たのでしょ。ならうってつけの所があるわ。」

レミリアは立ち上がった。瀬世羅木も立ち上がった。

レミリア「付いてきなさい。」

レミリアと瀬世羅木は部屋を出た。

長い廊下を渡り階段をおりる。

瀬世羅木「この扉は！！。」

レミリア「あら、知ってるみたいね。そうよ、この先がこの紅魔館の図書館よ。」

レミリアは扉を押す。

瀬世羅木とレミリアは部屋に入る。

瀬世羅木は驚いた。

凄い本棚が立ちはだかる。

小悪魔「レミリア様。」

瀬世羅木は小悪魔を見る。

瀬世羅木「小悪魔か、っと言うことはここの館長もいる筈。」

瀬世羅木は周りを見る。

レミリア「小悪魔、パチェは何処にいるのかしら？」

小悪魔「今、呼びます。」

暫くして小悪魔がパチュリー・ノーレッジを連れて来た。

パチュリー「レミィ。どうしたの？」

眼鏡をかけた、レミリアと変わらない少女だ。

レミリア「パチェ、彼の名前は瀬世羅木努、彼に此所の本を読むのを許可してあげる？。」

パチュリー「駄目よ！！。」

レミリア「何で？？。」

パチュリー「此所の本は幻想郷の全ての歴史やら魔法書まで置かれてる。それをまったく知らない者に見せる訳にはいかないわ！。」

レミリア「パチェ！そこを何とかお願いよ。」

パチュリー「駄目よ！！。どうしてもと言うなら、そこの男性、私と小悪魔を倒してからにしなさい！！。」

レミリア「何を言ってるの？パチェ！。彼が勝てる訳が無いでしょ？」

パチュリー「彼の思いを見せて貰うだけよ、でも殺す気でかかるけどね。」

パチュリーと小悪魔に睨まれる。

瀬世羅木が立つ。

瀬世羅木「なんで、俺は闘いと言う運命から離れてくれないんだ……。」

レミリアも隣に立つ。

瀬世羅木「さっき私は貴方にグングニルを投げた責任がある。いまも痛むその体で二人に勝つのは不可能よ。」

だが瀬世羅木はレミリアの方を向いて首を横に振った。

瀬世羅木「レミリア、ここは俺一人でやらせてくれ。」

レミリア「何を言ってるのよ！自殺行為よ！。」

瀬世羅木はパチュリーと小悪魔の前に立った。

パチュリー「行きますよ、小悪魔。」

小悪魔「はい！」

パチュリーと小悪魔はいっせいに瀬世羅木にかかる。

紅魔館の図書館（後書き）

第5章も終了しました。瀬世羅木は図書館の本を見せて貰うのにパチュリーと小悪魔と勝負をする。彼は果たして二人に勝つ事は出来るのか。次回は「友情」で会いましょう。

友情

パチュリーと小悪魔はいっせいに瀬世羅木にかかる。

瀬世羅木「レミリアに一人でやらせてくれと言ったのは良いけど……この状況はまずいかもしれないな。」

パチュリーと小悪魔から凄い殺気を感じる。

パチュリー「小悪魔！貴方は彼の動きを封じて！。」

小悪魔「分かりました！」

パチュリーと小悪魔は別れる。

瀬世羅木「俺の守られてる力はさっきのグングニルで駄目になったから…いやまてよ、もしかしたらまだ守られてるかも知れない！。」

レミリアは瀬世羅木を見る。

レミリア「・・・瀬世羅木、貴方は本当に普通の人間よ。パチェ達に勝つのは絶対に無理だわ。」

レミリアはパチュリー達を見る。

瀬世羅木は本棚の方に走る。

瀬世羅木「さすがにパチュリーさんもこの本棚目掛けて攻撃はしないだろう？」

小悪魔「無駄ですよ！」

瀬世羅木「何？！。」

瀬世羅木は小悪魔に捕まれた。

瀬世羅木「・・・無駄だと言うのはどういう…。」

小悪魔「此所の本全てはパチュリー様の力で守られてます。なのでパチュリー様の攻撃は動じません！」

瀬世羅木は力一杯小悪魔の腕を外そうとした。

瀬世羅木「びっ、びくともしない……。」

小悪魔の力はとても女性の力とは思えない力だ。

瀬世羅木「それに、俺は非力だからな。」

パチュリーが瀬世羅木の前に立った。

パチュリー「小悪魔！私が魔法を放ったら直ぐにどくのよ！」

小悪魔は頷く。

瀬世羅木「くっそーー！。」

瀬世羅木は必死に小悪魔の腕を外そうするが全く駄目だ。

パチュリー「・・・日符…。」

瀬世羅木は震える。

瀬世羅木「そっそれは！！」

パチュリー「ロイヤルフレア！！」

物凄い閃光が瀬世羅木をのみこむ。

瀬世羅木「・・・。」

小悪魔の腕が外れた。

だが、この状況から逃げれない。

閃光は完全に瀬世羅木をのみこんだ。

パチュリーと小悪魔はロイヤルフレアを放った先、瀬世羅木の立っている方を見る。

閃光は止みパチュリーと小悪魔が見る。

パチュリー「！！！」

小悪魔「！！！」

瀬世羅木は立っている。だが酷いキズだ。

瀬世羅木「ぐっ！。」

瀬世羅木は床に量びざがつく。

瀬世羅木はポケットに手を入れる。

瀬世羅木「・・・・。」

ポケットから出しライターを見ると大きなヒビが入って中のオイルが少し出てきてる。

瀬世羅木「つっ、次はもう、無いな……。」

パチュリーが又も瀬世羅木の前に立つ。

パチュリー「ロイヤルフレア、一回では駄目ね。ならもう一度……。」

パチュリー「日符……。」

瀬世羅木はうつ向く。

パチュリー「ロイヤルフレア！！」

又も閃光が出る。

瀬世羅木「今度こそ……完全に終わった……。」

ロイヤルフレアは瀬世羅木をまたものみこむ。

パチュリー「さすがに二回もうければ跡形も無くなったでしょ？」

パチュリーが小悪魔を向く。

小悪魔「パ、パチュリー様…まずい事になってます。」

パチュリーが瀬世羅木の立っている方を向く。

パチュリー「・・・レミィ…。」

パチュリーがロイヤルフレアを放った先、瀬世羅木の立つ前にレミリアが立っている。

レミリア「パチェ、もう終わりよ。」

瀬世羅木がレミリアを見る。

レミリアはキズ一つ無い。

パチュリー「レミィ!。どうして!そこまでして守る人なの?!。」

レミリアが微笑む。

レミリア「それは、私と貴方と一緒よ。私と貴方が友人でいるみたいに瀬世羅木と私も友人だからよ。」

パチュリーはうつ向く。

パチュリー「それは、同じ友人同士、争うな、っと言うことね……。」

レミリア「パチェ。彼を信用して、と言うのも無理かも知れないけど…。ここは、貴方からも許可してあげて。」

パチュリーは考えてる。

パチュリー「小悪魔、貴方はどうなの？」

小悪魔「私は、パチュリー様が良いとおっしゃえば。」

パチュリーは瀬世羅木の方に行く。

パチュリー「貴方の名前は？」

瀬世羅木「・・瀬世羅木努です。」

少し苦しい声で言う。

パチュリー「瀬世羅木努。私は、パチュリーノーレッジ。そして小悪魔ね。」

小悪魔が頭を下げる。

瀬世羅木は立ち上がろうとする。

だが。

瀬世羅木「あぁぁぁぁぁ！！」

又も激痛が走る。

パチュリー「貴方の怪我は私が責任を持って治します。」

瀬世羅木「・・・ありがとうございます。」

レミリア「パチェ。ありがとうね。」

レミリアが微笑む。

パチュリー「良いわよ。レミィの言う友情。それは、貴方が彼をかばった事で分かったわ。」

パチュリーは瀬世羅木を見て微笑む。

瀬世羅木「・・・良かった…。」

瀬世羅木はほっとした。

友情（後書き）

第６章も終了しました。瀬世羅木はパチュリーと小悪魔から図書館の本を見せて貰う事を許されました。彼はこれから、物語を紙に書いていく。次回は「読めない本」でお会いしましょう。

読めない本

パチュリーはキズだらけになった瀬世羅木を座らせ本を見てる。

パチュリー「治療法、治療法は…。」

パチュリーがページをずっと捲る。

パチュリー「・・・これね。」

パチュリーは何か言っている。

瀬世羅木「・・本当に治るのかな?」

レミリア「大丈夫よ。何て言ったて何でも物知りのパチェなんだから。」

瀬世羅木「!!!。」

瀬世羅木の体が輝く。

瀬世羅木のキズが消えていく。破れてる服も治ってきてる。

瀬世羅木「すっ凄い。」

瀬世羅木は体を動かす。

瀬世羅木「さっきの痛みがうそみたいだ。」

パチュリー「瀬世羅木、貴方の怪我は完全に治ったわ。・・・だけど、私以外の者が負わせた怪我があったみたいだけど?……。」

パチュリーがレミリアを見る。

レミリア「分かちゃった。」

レミリアは視線を瀬世羅木に向ける。

パチュリー「分かちゃった。と言う事は何かしたのね?」

レミリアの表情が変わった。

レミリア「・・・グングニルを一度だけ…。」

レミリアが申し無さげな顔で瀬世羅木を見る。

瀬世羅木「いやぁ、そんなに気にしなくって良いよ。」

パチュリー「瀬世羅木、貴方それでよく生きてるわね。」

瀬世羅木「いや、それはこれのおかげだよ。」

瀬世羅木はポケットに手を入れてライターを出した。

パチュリー「レミィが写ってるわね……。ちょっと貸して?」

瀬世羅木はライターをパチュリーに渡した。

パチュリー「・・・凄い力が込められてるわ。」

パチュリーがライターをまじまじと見る。

瀬世羅木「でも、それ自分の世界では普通のライターですよ。」

パチュリーがライターを瀬世羅木に返す。

パチュリー「どうやら、それは幻想郷に来た事で特別な力を手に入れたのかも知れないわ。」

レミリア「瀬世羅木、それのおかげで貴方はフランにも殺されずに済んだのよね。」

瀬世羅木はライターをポケットにしまった。

「キーンコーンカーン。」

時計の鐘の音だ。

皆は時計を見る。

瀬世羅木「・・3時になってる…。」

レミリア「もう、こんな時間！」

パチュリー「さすがに夜更かしね。小悪魔、私は寝るから後は貴方に本の整理を任せるわ。それが終わったら貴方も寝なさい。」

大量の本を持って飛んでる小悪魔が頷く。

瀬世羅木「レミリアとパチュリー、俺、この図書館で寝ても良いですか？」

レミリア「こんな所で寝たら、不健康になるわよ。」

パチュリー「レミィ…こんな所で、って私は此所でいつも寝てるのよ。それに、不健康になる、って…。」

レミリア「ごめんパチェ。悪い意味で言った訳じゃ無いわ。」

パチュリー「そうなると彼は何処で寝かせるの？。」

レミリア「空き部屋は沢山あるわ。」

瀬世羅木「空き部屋、何か申し訳無いな。」

瀬世羅木は自分の頭をなぜる。

瀬世羅木とレミリアは図書館を出た。

長い廊下でレミリアが一つの部屋を開けた。

レミリア「適当に使ってくれて良いわ。」

瀬世羅木は頭を下げる。

レミリアは部屋を出た。

瀬世羅木は部屋を見る。

机とベットがある。

瀬世羅木「空き部屋なのに凄く綺麗だな。咲夜さんがいつも掃除をしているからかな。」

瀬世羅木は机に座って携帯を出す。

瀬世羅木「なんか、検索しよう。」

瀬世羅木は携帯を見る。

瀬世羅木「何てこった、圏外だ。・・でも、此所に来て直ぐの時は三本立ってたぞ。」

瀬世羅木は頭を傾げる。

瀬世羅木「圏外じゃ仕方ない。寝よう。」

瀬世羅木はベットに入る。

瀬世羅木「ベットに寝るなんて、初めてだな。」

瀬世羅木は目を瞑る。

？「この、アパートで瀬世羅木努さんの死体が発見されたようです。」

？「瀬世羅木さんはどの様に亡くなられたんですか？」

？「何でもパソコンを打っている最中に亡くなったと思われます。」

瀬世羅木「おい、瀬世羅木努て俺の事じゃないか？」

？「今、瀬世羅木努さんの死体が運ばれてる様です。」

瀬世羅木「うっうそだ。そっそんな筈は無い……。」

警官みたいな人が部屋から出てくる。

瀬世羅木「！！！。」

瀬世羅木は驚いた。

目線の先に自分が瀬世羅木努本人が運ばれてるからだ。

瀬世羅木「うそだ、うそだ。」

瀬世羅木は冷や汗が出る。

瀬世羅木「うそだぁーーー！！！。」

ベットの所で瀬世羅木は目を覚ます。

外から日が出てる。

瀬世羅木「・・・何ていう夢だ。」

瀬世羅木はベットから起き上がる。

机に座る。

瀬世羅木「まさか…俺の世界では俺は死んでるのか？……。」

考えるのは止めた。あくまで夢だ。

「コンコン」

扉の叩く音だ。

瀬世羅木は扉の方に行き扉を開ける。

瀬世羅木「咲夜さん。」

咲夜「朝食をお持ちしましたよ。」

咲夜が机に食事を置いてくれてる。

瀬世羅木「ありがとうございます。」

咲夜は微笑み部屋を出た。

瀬世羅木は食事を食べる。

瀬世羅木「俺、凄く少食派なんだよな。」

瀬世羅木は食事を食べ終えた。

瀬世羅木「よし！早速、図書館に行くぞ。」

瀬世羅木は部屋を出て図書館に行く。

図書館の扉を開ける。

瀬世羅木「パチュリーは何処にいるかな？」

瀬世羅木は周りを見る。

パチュリー「後ろよ。」

瀬世羅木は驚いて後ろを振り向く。

瀬世羅木「びっくりしましたよ。」

パチュリーが微笑む。

パチュリー「レミィから頼まれてた物を渡すわ。」

パチュリーはメモ帳と万年筆を渡した。

瀬世羅木「これは。」

パチュリー「物語を書くんだってね。書くものが無かったらそれも出来ないからね。」

瀬世羅木「パチュリーありがとう。」

パチュリー「此所の本は適当に読んで良いわ。」

瀬世羅木「分かりました。」

瀬世羅木は本棚に入ってる本を見る。
瀬世羅木「まずは、紅魔館の歴史でしょ。」
瀬世羅木は本棚をくまなく探す。
瀬世羅木「あったー。」
瀬世羅木は本を取る。
本には紅魔館の歴史と書かれてる。
瀬世羅木は本をあける。
瀬世羅木「ふむふむ。」
瀬世羅木はテーブルに座る。
瀬世羅木「成る程、成る程。」
瀬世羅木はメモ帳に書く。
瀬世羅木「よし!。後は…幻想郷の人物でも調べよう。」
瀬世羅木は本棚を見る。
暫く本棚を見る。
瀬世羅木「あれ、無いぞ。パチュリーが持ってるのかな?」

瀬世羅木がパチュリーを探す。
奥にパチュリーが座ってる。
瀬世羅木「パチュリー。幻想郷の歴史を調べたいんだけど。」
パチュリーが本を渡す。
パチュリー「これよ。」
瀬世羅木は本を受けとる。
瀬世羅木は本をあける。
瀬世羅木「えーと、何々。……ん!。」
瀬世羅木は本の文字を読む。だが。
瀬世羅木「パチュリー。この本読めない。」
パチュリーが笑う。
パチュリー「どうやら、貴方はこの本と相性が合わないみたいね。」
パチュリーが本を受け取り本を積み重なってる本に置こうとした。
「バラバラ!!。」
本が崩れた。

パチュリー「又、やってしまったわ。」

パチュリーが本を片付ける。

瀬世羅木「自分も手伝いますよ。」

瀬世羅木とパチュリーは本を片付ける。

パチュリー「ごめんなさいね。」

瀬世羅木「とんでもないですよ。」

瀬世羅木は本を片付けてる。

一つの本が目に入った。

瀬世羅木はその本を取る。

瀬世羅木は本をあける。

中には名前がずらりと載ってる。

パチュリーが驚く。

パチュリー「そっそっその本の中身が読めるの？……。」

パチュリーの声が震えてる。

瀬世羅木「普通に読めますよ。」

パチュリーが真剣な顔になる。

パチュリー「その本は私にも読めない本！！。死んでる人にしか読めない本なのよ！！！。」

瀬世羅木の体が震えた。

本から手を離す。

瀬世羅木「・・・なっ、何だって……。」

瀬世羅木の顔から大量の冷や汗が出る。

読めない本（後書き）

第7章も終了しました。瀬世羅木はパチュリーに恐ろしい事を聞かされる。彼が見た悪夢、その夢が現実の物になってしまうのか。次回「運命」でお会いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6239y/

東方 紅魔館物語

2011年11月21日06時48分発行